



王者を告げる笛と歓声が、駒場の寒空に響き渡った。「名門・筑波」の復権を意味するその笛は、今年の筑波大にとって、もうひとつの大きな意味を持つ。第 65 回全日本大学サッカー選手権大会（インカレ）で、13 年ぶり 9 回目の戴冠を果たした筑波大。創部 120 周年、スローガン「不撓」を掲げ、見事な復活を遂げたチームを象徴するタイトルとなった。

そもそもサッカーのインカレは、関東枠からは 5 チームしか出場権がなく、他に出場方法は関東 6 位のフレッソフで勝つか、夏の全国大会である総理大臣杯で優勝するしかない。過去 8 度の優勝を誇る筑波大も、今大会が 3 年ぶりの出場。そもそも出場自体がかなりの狭き門なのである。それだけに、かかると意気込みも大きく、毎年各校によって熾烈な争いが繰り広げられる。「日本」の栄光を前に、燃えない選手はもう一人たりともいない。筑波大にはそれ以上に「絶対に負けられない」あるひとつの理由があった。

「昨年、当時主将の早川史哉（15 年度体育専門卒、現アルビレックス新潟）を中心に、当時のスローガン通り「二つになったチームは、前年に喫した筑波大創設後初めての関東リーグ 2 部降格の雪辱を晴らす最速 1 年での 1 部昇格を決めた。そして昨年 4 月、挑戦者として新たな立場で関東リーグ 1 部での戦いに挑んでいたチームに、その報は舞い込んできた。前主将・早川史哉が病床に臥し



たのである。J-1 の開幕戦フル出場を皮切りに、プロとしてスタートを切った矢先の出来事であった。試合後の違和感を精密検査したところ、急性白血病と診断された。これに対して、筑波大蹴球部も支援活動を始め、立ち上げた支援基金は、部員、筑波大生、サッカーファンなどから多くの支援を集め、昨年だけで 160 万円を超える金額を集めることに成功した（今年 1 月 11 日付でホームページにて送金を報告している）。そして、ピッチ外での活動だけでなく、選手たちの結果という形で早川選手にエールを送ろうと、「今日も闘おう。早川史哉と共に。」の合言葉を掲げ、タイトルへ突き進んでいた。栄冠まであと一歩とした決勝のベンチにも、アルビレックス新潟 28 番・早川選手のエールが掛けられていた。

そして、臨んだ決勝。序盤から圧倒的な攻撃を見せる筑波大。こぼれ球を拾った MF 西澤健太（体育 2 年、静岡・清水エスパルスユース）選

手が左足閃、強烈ミドルを 27 分に決めると、怒涛のゴールラッシュが始まる。終わってみれば、西澤選手の 2 得点、鈴木誠也（体育 3 年、静岡・ジュビロ磐田ユース）選手と北川将斗（体育 3 年、愛知・名古屋グランパスユース）選手のハットトリックで 8-0 という史上稀に見る記録的なスコアで日体大を退け、優勝を決めた。対戦相手であった日体大は、昨年の関東リーグでは唯一負け越していた相手だったことも考えると、闘病中の早川選手からもらったパワーも計り知れないだろう。チームにとって悲願だった全国制覇という結果は、闘病の続く早川選手への後輩たちからの恩返しともなった。

大会 MVP に選出された中野誠也選手は、同期では内定全国入りを決めた J-1 ジュビロ磐田入りを決めた。注目度も高まり、王者として臨む新年の戦いが昨年よりも熾烈なものとなることは必至であろう。復活を遂げた蹴球部から、今年も目が離せない。（高橋優太）



筑波スポーツ

平成 29 年 2 月 15 日(水)
第 168 号

題字: 中山雅史氏
(元サッカー日本代表・蹴球部 OB)



不撓

女子バレー インカレ 準V



「悔しさの残る準優勝だった」と主将の土井さくら選手(体育4年、秋田北高・秋田)は決して結果に満足をしていなかった。

昨年の11月下旬から12月上旬にかけて大田区総合体育館で行われたインカレで、筑波大学女子バレー部は準優勝を果たした。筑波大は初戦から決勝戦までストレートで勝ち進んだ。目の前の1点を大切にプレーをすることが意識されていたようだ。

決勝の相手は鹿児島県立大学。その試合では、筑波大はストレートで敗れてしまった。セッターの塚田しおり選手(体育4年、川崎橘高・神奈川)は「自分たちはもっとできた」と悔しさをにじませた。朝日優衣選手(体育4年、県立岐阜商業・岐阜)も「情けない。見てる人にも申し訳なかった」と決勝戦の試合に後悔をつららせていた。その試合内容を振り返っても、相手の鹿児島県立大学と振り返った。

大学にコテンパンにされた、相手の打ち込みがすごかった、自分たちの戦術がうまくいかなかった。と今までやってきた自分たちの力を発揮することができずに負けてしまったようだった。そこがさらに彼女たちの後悔する要因となったのだらう。「自分たちがやることをやって、それが通用せずに負けたのではなく、それ以前の課題で、とても悔いの残る試合だった」と振り返った。

4年生の彼女たち。彼女たちが中心となったチームが開始した1年前は、主将の土井選手はけがで試合にも、バレーさえできない期間があったそうだ。しかし、そんな中でもチームの支えがあり、最後にはインカレで準優勝という結果を残した。たとえそれが公開の場でも、あつたとしても、だ。1年間を振り返って、自分たちのチームはどんなチームだったかと伺った。「日本を全員が目指して、現状に満足することなくやってこれた」「下級生も上級生も関係なく意見を言い合えるチームだった」「お互いに仲間のことを信じあえるチームだった」と答えられていた。



津金恵

女子柔道

講道館杯全日本柔道体重別選手権大会

11月12日、13日に千葉ポートアリーナで行われた講道館杯全日本柔道体重別選手権大会女子63kg級において、筑波大学柔道部の能智亜衣選手(体育3年、宮崎・宮崎日大)が優勝、津金恵選手(体育3年、長野・松商学園)が3位に入賞した。

この講道館杯は、その年の全国大会等で好成績を残した選手のみが出場できる大会である。また、年齢制限はなく社会人も含めた中において、体重別で日本で一番強い選手を決める国内で最もハイ

レベルな大会の一つである。この大会で上位に入った選手はその後に行われる国際大会の代表選手に選ばれる。この大会で成績を残した能智選手と津金選手は12月に行われるグランドスラム東京の出場権を獲得した。

能智選手は昨年の講道館杯を制しておりこの大会は優勝すれば2連覇となる大会だった。津金選手は10月に行われた全日本学生柔道体重別選手権を制しており、二人とも優勝を狙える選手だった。今回はそんな二人に話を伺うことができた。

まず、大会を振り返って能智選手は「優勝することは最低条件だと思っていてその次の国際大会でも結果を残したかった。」「津金選手は『優勝を狙っていたので負けてしまったことは悔しいが、入賞して次の国際大会に繋げることができて良かった。』と話してくれた。

二人とも女子63kg級の強化選手に選ばれていることもあり、共通して世界で結果を残せる選手になることを今後の目標として挙げた。国内の柔道の大会は全て国際大会への代表選考を兼ねているため、国内で勝たないとその次のグランドスラムなどの国際大会、そして世界選手権といった大きな大会に出場することができない。国際大会へ派遣される選手は常に一人か二人であるため、国内



能智亜衣

の大会で常に優勝に近い成績を残すことが必要になる。女子63kg級は国内での競争も激しく能智選手、津金選手の二人を中心に他にも有力な選手が数人いる。そんな厳しい戦いの中で勝ち続けるために、能智選手は「誰かの対策をするのではなく自分の技術を向上させることが大切だと考えている。」「津金選手は自分では63kg級の中で身長が高い方ではないためパワーで負けないようウエイトトレーニングや体幹の強化を意識している。」「と語ってくれた。

同じ階級で同学年のお二人にお互いのことをどう思っているのか尋ねると、能智選手は「全国大会の決勝で戦うこともあるので、近くに良い刺激になる選手がいるなと思う。」「津金選手は「高校生の時は同じ大学になるとは思っていなかった。柔道の面では負けたくない相手だが、普段は仲がいいし同じ筑波大学で戦う仲間として日本のトップで争えることはうれし」と語ってくれた。

今後世界へ向けて高め合い競い合う二人の活躍に目が離せない。
(山中貴裕)





疾走

梶原悠未

昨年11月20日に行われた全日本選手権自転車競技大会において、梶原悠未選手(体育1年、埼玉・筑波大学附属坂戸高校)が、女子オムニアムの優勝を果たした。昨年に引き続き、二連覇の快挙である。

今年、梶原選手が優勝した「オムニアム」は4種目の合計得点で競われる複合競技である。昨秋に競技規則が改訂される以前は6種目2日間であり、今大会は4種目1日に改訂されてから初の全国大会となった。改訂によつてタイム系種目がなくなり、競争系種目のみになったが、新たに追加された「テンポレース」は梶原選手自身、一番得意とする種目だと実感した種目のようだ。「自分の脚質にすごく合っている。き

つい展開の中で、体力を削つたうえでスピードには自信があるので、テンポレースは自分に向いていると思った。」そう話す梶原選手は、持久力と速さを兼ね備えているタフな選手であることがうかがえた。また、競技系種目は梶原選手が自転車競技にのめり込んでいったきっかけでもある。もともと、高校入学までは水泳の選手として活躍しており、「これまでやってきた水泳はタイムを競う競技。自転車のタイム系種目は実力を伸ばすための目安にはなるが、競争系種目は戦術や戦略があつて、同じレース展開は二度と起こらない。そういうのを考えたり学んだりするのがすごく楽しく、自転車競技にはまっていた。」という。

今大会の直前にはワールドカップの1戦目と2戦目に日本代表として出場しており、10月末からイギリスとオランダに相次いで遠征していた。そんなハードスケジュールの中から挑んだ今大会を、「時差ぼけなどもあり、全日本選手権に向けて調整することはできなかったけど、(同じ4種目のオムニアムに出場したワールドカップでは悔しい思いをしたので、全日本では勝ちたいという気持ちが強かった。優勝できたときはすごくうれしかった。」と振り返った。

梶原選手は高校時代から日本代表として海外の合宿や大会にも出場している。今ではトレーニングレースも含めると1年間で40〜50もの大会に出場しているそうだが、モチベーションはどのように維持しているのか。尋ねたところ、「過去の大会の反省や悔しい思いから、次の大会では金メダルを取りたい、などの目標を決めて、常に頑張っている。」と話した。その迷いのない姿勢から、競技への情熱がひしひしと伝わってきた。

現在、目の前の目標は、2月に行われるアジア大会のオムニアムで優勝すること。その先にはもちろん、東京オリンピックでも活躍を続けている未来のオリンピックとして、梶原選手が疾走する姿を見守つていきたい。(島田すみれ)

結果一覧

【男子バスケットボール】	
第92回 天皇杯	全日本総合バスケットボール選手権大会
1回戦	筑波大学○99-72●早稲田大学
2回戦	筑波大学●74-86○アルバルク東京
【女子バスケットボール】	
第83回 皇后杯	全日本総合バスケットボール選手権大会
1回戦	筑波大学○78-70●アカシヤクラブ
2回戦	筑波大学○62-54●羽田ウィッキーズ
3回戦	筑波大学●62-90○アイシンAW
【男子バレーボール】	
平成28年度	天皇杯・皇后杯全日本バレーボール選手権大会
1回戦	筑波大学●1-3○トヨタ自動車サンホークス
【女子バレーボール】	
第63回 秩父宮妃賜杯	全日本バレーボール大学女子選手権大会(インカレ)
2回戦	筑波大学○2-0●福島大学
3回戦	筑波大学○2-0●国士館大学
4回戦	筑波大学○3-0●九州共立大学
準々決勝	筑波大学○3-0●神戸親和女子大学
準決勝	筑波大学○3-0●順天堂大学
決勝	筑波大学●0-3○鹿屋体育大学
結果	準優勝



【男子サッカー】	
平成28年度 天皇杯・皇后杯	全日本バレーボール選手権大会
1回戦	筑波大学○3-1●仙台ベルフィユ
2回戦	筑波大学●0-3○岡山シーガルズ
【女子サッカー】	
第65回 全日本大学サッカー選手権	2回戦
2回戦	筑波大学○5-0●中京大学
準々決勝	筑波大学○2-1●関西大学
準決勝	筑波大学○3-0●阪南大学
決勝	筑波大学○8-0●日本体育大学
最終結果 優勝(13年ぶり9度目)	
MVP	中野誠也(体育3年)
ベストFW	北川柊斗(体育3年)
ベストMF	西澤健太(体育2年)
ベストDF	小笠原圭祐(体育2年)
ベストGK	阿部航斗(体育1年)
フェアプレー賞	筑波大学

【女子サッカー】	
第22回 関東女子サッカーリーグ入替戦	12月11日
筑波大学○3-2●慶應義塾大学	12月17日
筑波大学○3-1●武蔵丘短期大学	
【ラグビー】	
2016年度	関東大学対抗戦Aリーグ(9月〜12月全結果)
筑波大学○15-13●青山学院大学	
筑波大学●20-28●慶應義塾大学	
筑波大学●12-46●早稲田大学	
筑波大学●28-48●明治大学	
筑波大学○46-14●日本体育大学	
筑波大学○82-14●成蹊大学	
筑波大学●24-29●帝京大学	
最終結果	3勝4敗 第5位
【硬式庭球部】	
平成28年度 関東学生テニス選手権大会	
女子ダブルス決勝	
米原実令・森崎可南子(筑波大学)	○2-1●上唯希・金井綾香(早稲田大学)
結果	女子ダブルス優勝
第53回 全日本学生室内テニス選手権大会	
女子シングルス本戦SF	
牛島里咲(筑波大学)	●0-2●上唯希(早稲田大学)
結果	女子シングルス第3位
女子ダブルス本戦F	
米原実令・森崎可南子(筑波大学)	○2-0●細沼千紗・上唯希(早稲田大学)
結果	女子ダブルス 優勝
【弓道部】	
第48回	関東学生弓道選手権大会決勝大会
女子団体	
先攻 都留文科大	60射27中
中攻 筑波大学	60射42中
後攻 大東文化大	60射34中
結果	筑波大学 優勝

平成28年度

体育会賞特集

男子バスケットボール部

第65回関東大学バスケットボール選手権大会 優勝
第92回関東大学バスケットボールリーグ戦 優勝
第68回全日本大学バスケットボール選手権大会 優勝

女子バスケットボール部

第67回全日本大学バスケットボール選手権大会 優勝

ダンス部

第29回全日本高校・大学ダンスフェスティバル神戸
文部科学大臣賞

バドミントン部

全日本学生バドミントン大会女子団体 優勝



瓜兼汐里



森本修多



田村元延



松浦佑希

体操部



鈴木直美

オリエンテーリング部

Asian Junior & Youth Orienteering Championships 2015
男女混成リレー1位

バドミントン部

第4回 全日本学生バドミントンダブルスミックス
選手権大会 優勝



安田美空

SGG THILAND OPEN
女子ダブルス 3位



加藤美幸・柏原みき

ダンス部

アーティスティック・ムーブメント・イントヤマ2016
審査員賞(第3位)



中谷真弓・樋浦瞳
石橋華須美

アーティスティック・ムーブメント・イントヤマ2016
松本千代賞(第1位)



天野絵美・野村愛理
荻野睦菜・田中千聖

サイクリング部



全日本学生選手権個人ロードレース大会
第57回全日本学生選手権ドラッグ自転車競技大会
I.P.予選優勝・500mTT予選優勝・PP決勝優勝

梶原悠希

柔道部

全日本学生柔道体重別選手権大会63キログラム級1位
アジア選手権大会63キログラム級2位



津金恵



田川兼三



藤原恵美



佐々木健志

全日本ジュニア柔道体重別選手権大会
81キログラム級1位

国体成年女子の部茨城県優勝

全日本学生柔道体重別選手権大会66キログラム級1位
ロシアジュニア66キログラム級1位

ポーランドジュニア国際大会70キログラム級3位



中江美裕

グランドスラムチューメニ63キログラム級1位
国体成年女子の部茨城県優勝



能智亜衣美

グランプリウランバートル52キログラム級1位
国体成年女子の部茨城県優勝



内尾真子

水泳部



稲場航平

第10回アジア水泳選手権大会水球競技優勝



大久保柁

第10回アジア水泳選手権大会飛込競技2位

第92回日本学生選手権水泳競技大会
飛込競技女子高飛込優勝
第71回国民体育大会水泳協議会2016
飛込競技女子高飛込優勝



榎本遼香

第92回日本選手権水泳競技大会飛込競技兼
国際大会派遣選手選考会1m飛込優勝

陸上競技部



勝山眸美

日本インカレハンマー投げ優勝

U-20世界陸上選手権大会4×100mR2位



山下潤

リオオリンピック三段跳び出場



山下航平

医学水泳部



山岡明奈

第15回フィンスイミングアジア選手権大会
女子1500mサrfワイス2位
第12回フィンスイミング日本学生選手権大会
女子800mサrfワイス1位

第59回東日本医科学生総合体育大会水泳競技
50m背泳ぎ・100m背泳ぎ1位



阿部祥子

医学陸上競技部



長澤圭吾

第59回東日本医科学生総合体育大会
陸上競技部門男子800m優勝



松岡修平

第59回東日本医科学生総合体育大会
陸上競技部門男子走幅跳優勝



皆さんこんにちは。第41代
筑波大学体育会執行委員会
委員長の久田陽介です。本
学体育会は、昨年結成40周
年を迎えました。50周年と
いう大きな節目に向けて、
この第41代の歩みを進め
て参ります。

昨年、リオデジャネイロオ
リンピックが開催され、本学
体育会の学生が世界の舞台
で活躍する姿を観ることが
できました。大きなプレッ
シャーを背負いながらも、堂々
と戦う姿勢に感銘を受けると
同時に、誇りに思いました。

一方、国内では、男子バスケット
ボール部のインカレ三連覇
やバドミントン部女子のインカ
レ三連覇、そして蹴球部の13
年ぶりのインカレ優勝等、
2020年東京オリンピック
での活躍を感じさせるような
知らせもありました。今後
より一層の発展を、執行委員
一同お祈りしています。

本学体育会はいわゆる体育
会系の部会だけでなく、同
好会や独自で運営し東医体
で活躍する医学部会によつて
も構成され、多様な目的を
持った学生が所属していま
す。これは本学体育会独自
の特徴です。勝利を求めるこ
とだけでなく、純粋に楽し
むこともスポーツの重要な要
素です。それぞれの団体・
構成員が互いを尊重し、支
え合うことで、体育会の発
展や大学全体の応援に繋が
ります。そのために執行委
員会は支え続けます。

最後に、体育・スポーツに
は、人と人をつなぐ力がある
と私は信じています。構成員
同士はもちろん、市や県など
地域の人々、日本全国そして
世界の人々が体育・スポーツ
で繋がり、支え合う。私た
ちが責任を持って、実践する
ことで、そんな世の中を作る
ことができるかと私は本気で
思っています。

(久田陽介)



金光晴香

第59回東日本医科学生総合体育大会
陸上競技部門女子走高跳優勝



岩下美紗子

第59回東日本医科学生総合体育大会
陸上競技部門女子砲丸投・円盤投・槍投優勝

体育会委員長挨拶

体操部 ライト



瓜兼汐里



皆さんもスポーツター等で一度は目にしたことはあるであろう「ライト」。このライトの技能を競う、第12回全日本学生ライト選手権大会で筑波大学体操部は好成績を取った。今回はその中でも2年生という若さで部内随一の成績を取った瓜兼汐里選手(休専2年、埼玉・浦和第一女子高)を取った。瓜兼選手がライトを始めたくっかけは高校時代、筑波大のOCで体操部のパフォーマンスを見たことだったそう。そして競技を始めて2年足らずという短い期間で、今回の学生選手権では個人総合で準優勝、跳躍部門では優勝を果たした。まず、今回の成績についての感想を伺うと、「昨年に比べ、大会に向けての練習をしっかりと積むことができたので、達成感がある。」とのことだった。体操部は他の運動部と異なり、競技大会の優勝だけを目標とするわけではなく、パフォーマンス作品を作り、それを観客

の前で発表することも大事にしている。その発表に向けた練習と両立しながら、自主的にライト競技の大会に向けた練習を積むことには、他の部活動とは異なった難しさがあったようだ。

また、大会成績では跳躍部門での優勝が目立っているが、他の部門でも好成績を収めた。直転部門2位、直転部門3位を取っており、ここにも手ごたえを感じているようで、「練習でも3種目全てがしっかりとできるように練習してきた。これからもオールラウンドに技能を伸ばして、個人総合での優勝を目指したい。」とのことだ。

体操部は3年生が部の中心となる活動をする。その3年生を迎えるにあたっての目標を最後に伺ったところ、「個人としてインカレで個人総合優勝。ただ、個人の競技の方ばかりに目を向けることなく、体操部としてのパフォーマンスや発表にもしっかりと取り組み、上手に両立

していきたい。」と語ってくださった。体操部は今夏にノルウェーで行われる、第3回World Gym for Life Challengeという世界中から団体が集結して体操のパフォーマンスを競う大会に参加するとのことだ。

（岡崎純豊）

高飛込シンクロ アジア準V



大久保 悠

昨年11月に東京辰巳国際水泳場で開催された第10回アジア水泳選手権大会において、大久保悠選手(体育2年、茨城・土浦日本大学高校)が金子舜汰選手(セントラルスポーツ)と共に19日の高飛込シンクロに出場し、準優勝に輝いた。また、大久保選手は翌日20日の高飛込においても4位入賞を果たした。準優勝した時の気持ちについて、「初めての国際大会だったのうれしかった。だが、(優勝した)中国人選手の実感したもので、そこに近づけたらいいなと思った。」と振り返った。

大久保選手が飛込を始めしたのは小学1年生の頃。競技歴はおおよそ14年にも及ぶ。飛込の魅力を探ると、「迫力です。やっている方も高まって楽しいし、見ている人も盛り上がるスポーツかなと思う。」と話した。飛込の中でも特に「技が決まった時の達成感が一番大きい。」という10メートル高飛込が一番好きだそう。

今回準優勝した高飛込シンクロの練習は夏から始めた。「お互いそれぞれのタイミングがある中で、二人で飛び込む時にどれだけ息をそろえて同時に技を決められるか。宙返りの回転のスピードも合わせないといけないのが

難しい。」と、個人種目にはない苦労も体験したが、「二人でやることで、お互いに高めあえるのが良い。」と、シンクロならではのおもしろさも見出したようだ。

普段の練習は、夏は大学で、それ以外の時期は土浦市内のプールで行っているという大久保選手。現在の目標は、インカレ、国体、日本選手権の3大会で、高飛込の優勝を果たすこと。また、「今回のアジア選手権が、最初で最後にならないように、コンスタントに国際大会に出場できるようにしたい。」と、世界にも目を向けている。今回の経験を存分に活かし、今後さらなる飛躍を遂げることだろう。

（島田すみれ）



(写真左)

第14回

リレーコラム

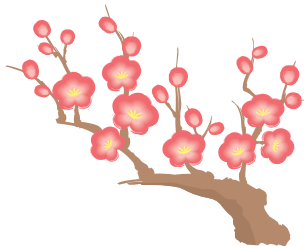
こんにちは！筑波スポーツ編集員、島田すみれです。編集部でただひとりの1年生であり、僭越ながら、今号より編集長に就任しました。どうぞよろしくお願いたします。

さて、秋学期も終わり、学内では新歓に向けて各団体が動き始めていますね。私たち筑波スポーツ編集部も、たくさんのスポーツ好きの1年生の入学を心待ちにしています。そんな中でも、私たちは現1・2年生の現役筑波大生からの入部も随時歓迎しています。本紙の編集員は、文章を書くこと

や写真を撮ることが得意な人、というよりは、スポーツが好きで、筑波大のアスリートと交流したい人が集まっています。マスコミ関係に興味がある方はもちろん、ただ筑波スポーツが好き！という方も、ぜひ一度、編集室を覗きにきてみませんか？

（島田すみれ）

発行所/筑波大学体育会
(TEL.029-853-2589)
発行人/若木祥太
編集/筑波スポーツ編集部
tsukusupo@hotmail.co.jp
責任者/島田すみれ(編集長)



編集長
島田すみれ(比文1年)
会計
西村海星(比文2年)
広報
山中貴裕(医療科2年)
編集スタッフ
猪本あかり(比文3年)
岡崎純豊(比文3年)
高橋優太(文シス3年)
小枝香葉子(比文2年)

編集後記
今号は今年度最後の新聞ということで、例年通り、体育会賞の特集ページを4・5面に掲載しました。多くの団体の活躍が見られ、筑波スポーツの多様さ・幅広さを実感します。受賞者の皆様、おめでとうございます。さて、今号の目玉はやはり蹴球部の全国制覇です。新聞各社やニュースなど、マスコミで筑波大蹴球部の栄光が取り上げられているのを目にする度に、誇らしく、うれしい気持ちになった方も多いいのではないのでしょうか。

団体スポーツが筑波大の顔として健闘している中で、今号では個人種目で結果を残した選手を中心に取り上げました。今後も普段記事に取り上げることの少ない競技にも注目していきたいと思

次号は4月、新歓号です。
(島田すみれ)